

いつものように無言の夕食だった。テレビのバラエティ番組だけがつまらない笑い声とやる気のない拍手でダイニングキッチンを占拠していた。父は三百五十CCのカンピールを一本、自分でコップに注ぎながら飲んでいる。夕食のメニューは、父が仕事帰りに買って来たほかほか弁当だった。

「ごちそう様。父さんはパソコンやってるから、いつものように食べたら流しに浸けておいてくれよ」
父が立ち上がり、こった首を回しながら席を離れたので食卓には僕一人になった。うつろなテレビの音が響く中でただ一人、僕は黙々と魚フライを咀嚼した。

両親が離婚して三ヶ月。夕食時はずっとこんな感じだった。

離婚の原因は父の浮気だ。父も引け目があるんだろう、僕の怒りを十分承知していて無理に話をしようとはしない。

三人暮らしたったマンションから母だけが出て行き、僕と父は暗い部屋で情性の毎日を送っている。

この状況が変化するのは父が再婚した時だろう。

どう変化するのか、予想も出来ない。僕は荒れ狂って非行に走るのか、それとも黙って家出するのか。僕にとっては今のところ選択肢はその二つ

だった。

新しい母と、おとなしく一緒に暮らす事は考えられなかった。

隣の部屋に置いてある電話の着信音が鳴り出したのは、すでに僕が食器を流しに片付けた後だ。

どうせ父の病院から呼び出しの電話だろう。僕は電話が鳴るに任せて知らん振りしてテレビに見入っていた。

「おい、智樹、電話だぞ」

父がコードレス電話の子機を持ってやってきた。

眼をあわすこともなく僕はそのプラスチックの塊を受け取った。
今ごろ誰だろう。

「よお、智樹、もう飯食ったか？」

声の主は近所に住んでいる親友の和雄だった。

「なんだよ、今ごろ」

僕は不機嫌な声で言った。いつも今の時間は不機嫌だった。父と二人きりの夕食時は。

「いやあ、こんな時間に悪いんだけど、今日の宿題なんだったかなあと思ってたさ」

能天気な和雄の声はやけに大きく受話器から聞こえてくる。

「宿題やっていく気があるんだ。まじめだなあ、いつになく。宿題は、中秋の名月を見て俳句を一つ作ってくること、だっただろ、ちゃんと憶えておけよ」

そうだ、宿題があったのだった。俳句づくりなんてかったるい事だ。

「ああそうだった。……それでさ、智樹、国語得意じゃん、俺のも一つ作ってくれないかなあ」

「なんだよ、最初からそれが言いたかったんだろ、冗談じゃないって。自分の事は自分でしなさい」

僕は受話器の通話終了ボタンを押そうと、受話器を持ち替えた。

「ちよつとちよつと、切るなよ。まだ話があるんだから」

しかたないなあ。再び受話器を耳に当てる。

「今どこにいるんだ？」

和雄が聞いてきた。どこって？ 家に決まってるじゃ、と言いかけて、和雄の意図が理解できた。

「食卓だよ、オタクはベランダでお月見かい？」

「その通り。お前もベランダに出てみるよ」

和雄はうちにもよく来るから、電話がコードレスだと言つのはわかっているのだ。僕はテレビのスイッチを切って居間に行った。

居間には誰もいない。父は自分の部屋できつとネットサーフィン中だ。窓を開けて狭いベランダに出てみた。

真ん丸い月が田原山の上に、まるで『未知との遭遇』のUFOみたいに浮かんでいた。きれいな月だ。澄んだ空気の中、黄色みをおびたその色は、ほんのちよつとでもハンマーで叩けばこなこなになってしまふ陶磁器のようだ。

「二人で俳句詠もうぜ、俺から行くぞ……ええと、物干しの間に浮かぶ丸い月、こんなのどうかかな」

僕はこらえ切れずにマンシヨンの三階の暗いベランダで笑い転げてしまった。

近所迷惑な話だ。

「それって見たままじゃん。もう少し工夫しろよ。字数をあわせりゃいいつてもんじゃないでしょうが」

「駄目かなあ、狭いベランダで物干しの棒に邪魔されながらも名月を見ている不憫な情景がよく出ていると思うけどなあ」

「なるほど、それにしてもなあ」

「じゃあお前ならどう詠むんだ、お手本をどうぞ」

和雄が挑戦状を叩きつけてきた。うっむ、どう切り返してやろう。

「わかった。月を見て 未知との遭遇 思い出す これでどうだ？」

さつきまで沈んでいた気持ちが少しずつ晴れてきた。

和雄の思いやりも感じるし……。

「俺のどこが違うんだよ。下手なところは同じじゃないか」

「田原山つてちよつと角張っていて未知との遭遇の山に似てるだろ、その情報を詠み込んだんだよ」

「まあいいけどさ。ところで話つてのはそんな事じゃなくてさ……」

和雄がまたまた話題を変えた。どうやらやつと本題に入るらしい。

「おまえ、海に月が沈むところ見た事有るか？」

実に唐突な質問だ。

「満月が海に沈むところ？ いやあ、そう言えはないなあ。夕陽は写真でもよく見るけど、満月が水平線に沈む映像ってあんまりないよね」

記憶の中のもるもるを探りながら僕は答える。

「俺、月って海に沈まないのかもしれないなあって考えてたんだ」

和雄は何を言いたいんだろう。太陽も月も西の海に沈むのはおんなじ筈じゃないか。僕の気持ちを察したんだろう、慌てて和雄が付けた。

「もちろん、物理的に西の海に沈むのはわかってるよ。でも、その映像があまりないって事は、月が沈む前に太陽が出てきて月が見えなくなってしまうんじゃないかと思っただ。少なくとも日本では太陽と月の関係で満月が夜の海に沈んでいくのは見えないんじゃないかってね」

なるほど。その理屈ならわかる。確かに言われてみれば有りそうな事だ。

「それで？」

先を促す僕に、和雄は少し間をおいて言った。

「今日は雲ひとつない天気だろ、満月が海に沈むところ、一緒に見に行こうぜ」

なんと夜間外出のお誘いだっただ。

夜中に出歩くんなんて、父が許すはずがない。夜出歩くのは不良の始まり

だって、母もよく言っていた。でも僕は即座に返事をする。

「面白そうだな。行くよ。西向の海まで自転車で1時間くらいかな。でも、何時頃出ればいいかな」

月はまだ東の山の上だ。

「太陽が出てから沈むまでが12時間だろ、月はその半分くらいだから6時間として今から5時間後くらいじゃないかな、沈むのが。と言う事は4時間後に家を出ればいいってことだよ」

すでに考えていたんだろう、和雄はすらすらと答えた。

今は午後9時だから、出発は午前1時頃か。真夜中だ。

「真夜中にお前と二人でサイクリングか。ぞつとしないな」
僕に答える和雄の言葉の中には意外な事実が含まれていた。

「実はもう一人同行者がいるんだ。矢野鮎子なんだけど、本当はあいつが言い出したことなんだ。海に沈む月が見たいって」

「あの優等生の矢野が？ 夜間外出するって？ 信じられないな」

「あいつの所もいろいろあるんだよ……じゃあまたあとで」

用が済むとすぐに和雄は電話を切った。

あいつの所も、と言う言葉で、やはり和雄は僕の事心配してくれてたんだとはつきりした。そして矢野に対してもだ。噂では矢野の家も最近両親が離婚しそうだということだった。

全く最近の大人はどうしてこんなに簡単に離婚できるのだろうか。

子供までいるというのに。女性の就職率が増えて、男に頼らなくても生きていけるようになった事がその遠因のひとつなら、いっそのこと女性には仕事なんかさせなきゃいいんだ。子供の立場で言えば、お母さんはただお母さんであるだけで充分なんだから。

ひんやりとした外の空気をたっぷり吸い込んで、僕は部屋に入った。

でも、去年まで小学生だったとはいえ男女が夜中に一緒に出歩くなるといいのだろうか。良いわけないか……。

僕は居間を通り過ぎて父の部屋に行ってみた。

半開きの扉からのぞくと、父はパソコンで何やらテキストを打っていた。どうせまたつまらない小説でも書いてるのだ。僕の気配に気づいた父が、手を止めて振り向いた。

「中秋の名月を見て俳句作るのが宿題だったんだけど、いいのが思いつかなくて……父さん何かない？」

和雄との会話で僕は少し機嫌が良くなっていたのだ。父親を試してやれ、といういたずらな気持ちもあって聞いてみた。

父は最初困ったような顔をしたけど、すぐに笑みを浮かべていった。
「俳句かあ。俳句は季語とかあって難しいんだよな。そうだな、ちょっと待つて」

父は目をつぶって考え込んでいる。

そんなに深く考える事でもないだろうに。中学生の宿題なのだ。適当でいいんだ。息子相手にそんなに格好つけなくなっちゃった。そんな言葉がもう少しで出ようとしたとき、父が目を開けた。そしてすつと一息吸い込んで言った。

「去る人の影まで照らす お月様、こんな出来ましたけど」

父がふざけて笑った。父のそんな笑い顔なんて久しぶりに見た。

僕自身をほっとさせてくれる優しい笑顔だった。

「なにそれ。意味わかんないよ」
でも僕は笑顔を返す事も無く、そっけなくそう言つと自分の部屋に戻った。

目覚ましのベルが、僕を浅い眠りの海からゆっくりと浮上させる。セットしていた時間の12時40分だ。予定通り僕はジーンズに着替え、足音を立てないようにして自分の部屋を出る。父は既に寝ているみたいだった。

トレーナーを着ていくかウインドブレーカーを羽織っていくか迷ったけど、汗をかきそうだったから、長袖 टीーシャツの上からウインドブレーカーを羽織ることにした。マンションの自転車置き場から、街灯の少ない薄暗い道路にこぎ出る。

自転車に取り付けた懐中電灯の頼りない光で、暗い道がほんの少しだけ浮き上がる。満月はもう西の山に半分隠れようとしていた。

思ったよりも沈むのは早いかもれない。焦る事はないと思うけど、自転車をこぐ力が入る。

和雄とは、神社の鳥居のところまで待ち合わせだった。自動販売機が幾つか並んでいて、他の場所と比べて少し明るい場所だった。そこに矢野も来てるはずだ。

しかし、着いてみると神社の石段に座り込んでいる人影はひとつだった。言い出しつぺの矢野が来れなくなったのだろうか？

女はこれだから。自転車を降りて近づく。

「矢野は無理だよ。あんな優等生が深夜外出なんて出来ないって」

しかし僕の言葉に帰ってきたのは、女の子の声だった。

「あたしの何が無理だったのよ、遅くなるの和雄くんの方よ。出掛けに見つかったから遅くなるって、さっき電話あったわ。先に行つてくれれば必ず追いつくってさ」

懐中電灯の明かりの中で矢野は口を尖らせて上目遣いに僕をにらんでいた。

何てことだ。考えてもみないストーリーだった。

今まで矢野の事を女の子だなんて意識した事なかったのに、深夜に誰もいない神社で二人きりだと、なんだかひどく居心地の悪さを感じてしまう。「海に沈む月を見たいって、和雄に頼んだの？」

何を話していいかわからなかったからか、どうでもいいような質問をしてしまった。

「そうよ。聞いたんでしょ。それに、言っておくとあなたを誘おうって言ったのもあたし」

「どうして僕まで？」

僕が落ち込んでると思ったからかな。でも……

「あたし、智樹くんが好きだからかな……」

僕があっけに取られて何も言えないでいると、矢野が立ち上がり、尻の砂を払って言った。

「ボケっとしてたら、月沈んじゃうよ。行こう」

矢野は自分の自転車にまたがり、滑らかにこぎ出した。

矢野の自転車は21段変速機と、フロントサスペンション付きのかわいいMTBだった。僕の安物とは違って、フィッシャーのブランド品だ。安くても10万は下らないだろう。矢野は案外自転車マニアなのかもしれない。

「いい自転車に乗ってるな」

好きだなんていわれて、どう反応していいかわからない僕はとりあえず

そんな事を言ってみた。矢野は振り向いて不機嫌そうに言った。

「別に何でも良かったんだけど、その売り場にあった一番高いの買わせたの」

「買わせたって？」

「離婚する罰よ」

なるほど、そう言うことが。気持ちとはとてもよくわかる。

僕の部屋にあるパソコンと同じってわけだ。

町の西側にある田原山を迂回するように続く国道を黙々と進む。

でも、さっきのあれって、愛の告白だったのだろうか。随分そっけなく

て投げやりな告白だったけど。普通はもっと顔を赤くしたり、どもりながら言った後すぐに逃げていくなんて演出が必要なはずだ。

どう考えればいいんだろう。矢野のことは僕も嫌いじゃない。

背が僕より少し高すぎるのが難点といえば難点だけど、すぐに僕が追い越すはずだから大丈夫だ。顔もかわいいし頭もいい。彼女にするにはまあまあ良い方じゃないかな。

自転車で並んで走つてるとはいえ、風の音やペダルの音が結構うるさくて大声でしゃべらない限り話も出来ない。

国道沿いには民家は少ないけど、真夜中の道で大声上げるのは気が引ける。しかし話せないほうが今は都合良かった。

山を迂回してきたから山の陰に入っていた満月が少しずつ見え始めた。

和雄は追いついて来れるのだろうか。とにかく早く来て欲しい。

二人きりだと、なんとも気まずい雰囲気だ。

ゆるい左カーブを回るとコンビニエンスストアの明かりが見えてきた。

そしてその駐車スペースには派手な改造を施した、いかにも暴走族的なバイクが三台止まっている。周囲に人影は無いけどまずい。

見つかつたらどうなるかわかつたものじゃない。一瞬僕は引き返すかそのまま突っ切るか迷った。

コンビニで買物中の暴走族が今にも出てきそうな気がする。僕の前を走つて矢野はそんな事お構いなしに平然と進んでいる。

僕だけ引き返す事はできない。仕方がない。

僕は矢野を追い立てるように、微かに急げと声をかけてスピードアップした。

僕が何を思つてるのか、やっと矢野にも伝わつたのだろう、矢野が急にこぐスピードを速めた。コンビニの真横を通り過ぎる。いいぞ。このままこのまま。

後ろで『ありがとうございます』と声が聞こえた。

男の話し声が何か聞こえて、すぐにエンジン音が響いてきた。道なりに左に曲がって、今度は右に曲がる。周囲は畑や倉庫がいくつかあるだけの見通しのいい場所だった。

後ろからバイクの音と、変なホーンのような音が聞こえた。

絶体絶命だ。背中が冷たい汗で濡れていた。

バイクのライトがあつという間に近づいてきた。

一台が僕たちの前に回り、道をふさぐように停車した。

一瞬、脇をすり抜けようとした矢野が、別のバイクで止められた。駄目だ。捕まってしまった。

3

「こんな夜中に仲良くデートかよ、中坊の分際で生意気だなあ」前に回った男がバイクから降りてきて言った。

僕の頭の中が、かつと熱くなった。どうしていいかわからない。

「そこどいてください、通れないでしょ」

随分強気な矢野の声が聞こえた。

後ろの方の男達も降りてきて、僕の横に立った。全部で5人だった。近くで見ると高校生くらいに見える。背丈は皆180センチ近いし、が

つしりした体型はとて肉弾戦で勝てそうな相手じゃない。

「気が強い女だなあ。自分の立場がわかってるのかい」

坊主刈にしてる顎の張った男が言った。しゃべり方なんてとても高校生には思えない。テレビで見るやくざかチンピラのそれだった。

「今日はラッキーだったな。ピチピチの美少女をみんな女にしてやろうぜ」

すでに決まった事のように坊主刈が言った。他の四人もへらへら笑つて

ほら、こつちに来いよ、と腕を引っ張られて、抵抗するまもなく矢野は

自転車から下ろされた。矢野の自転車が倒れて金属的な音が響いた。割れたライトの破片が遠い光を反射しながら僕の足元に飛んできた。「いや、止めてよ変態」抵抗する矢野は、二人がかりで両脇をつかまれて引っ張っていかれた。道路わきの空き地にそのまま全員がずるずる移動する。

「お前は行っていいぜ。男に興味はないからな」坊主刈が僕の自転車の後輪を蹴っ飛ばした。

バランス崩して倒れる自転車から飛び降りて、僕は思い切り向かっていった。

勝てるかどうかなんてどうでも良かった。

このまま矢野を連れて行かせることだけはどうしても止めないといけない。

それだけ考えて、突っかかっていく。

そんな僕の行動はけんか慣れした彼らはお見通しだったのだろう。不意をつくつもりがあっさり受け止められて、足をかけて転ばされた。

おらおら、だらしないぜ。女を守りたいんだっいたら根性でかかってこい。

ほら、もう一発お見舞いだ。

僕は立ち上がるたびに柔道の技で地面に叩きつけられた。

止めてよ。ひどいわよ。もう許してよ。

矢野の声も彼らの罵声も僕の頭の中の洗濯機でぐるぐる回っているようだった。

身体がだるくてあちこち擦りむいた。関節も痛くてどうにも立てなくなってしまう。

「こいつを許して欲しかったら、おまえ、此处で裸踊りしてみろよ」坊主刈が言ったのは僕にはなく、矢野に対してだった。

矢野に裸踊りをやらせようとしているのだ。

「わかった。何でもするから智樹クンを許してください」

矢野は、僕と男達の間立って、上着を脱ぎ捨てた。

そしてジャージのズボンに手をかける。本気なのだ。

やめる。そんな奴の言う事なんか聞くな。

僕のかすれた声は彼女の耳にも届かない。

もう駄目だ。

ヒーローは現れない。和雄が来てくれればと思ったけど、仮に来たとしても5人組にはかなわないだろう。

さつき齒向かわずに逃げて助けを呼んだほうがましだったかもしれない。

コンビニまで戻って助けを呼ぶのが正解だっただろう。

でも、矢野を置いて逃げるなんて出来なかった。

その方が矢野にとってもいい事だとわかっていても、矢野に卑怯だと思われるのが、僕はいやだったのだ。

彼女に意気地なしと思われるのが嫌だったばかりにせっかくのチャンスを無にしまったのだ。そして僕は押さえつけられて、彼女が乱暴されるのを見守るしかない。手足がぶるぶる震える。涙がこぼれ落ちる。自分のエゴイズムのために彼女までぼろぼろにされてしまう。

「智樹クン心配しないで、あたしこんなのなんとも思っていないから」

矢野の声は無表情というか無感動な声だった。

青白い満月の光の下で、矢野はブラジャーを外した。

まだ成長段階の小さな乳房は、つばを飲む男たちの目の前にあらわになった。

シミ一つない磁器のように滑らかな曲線だった。

見ちゃいけないと思って視線を外す事が出来なかった。磁石に吸い付く鉄片のように彼女の胸に吸い寄せられた。

下はジャージも脱いでパンツ一枚だ。

「ほら、最後の一枚ももつたいぶらずに脱いでしまいな」
僕を押さえつけてる一人を除いて、男達はニヤケ顔で彼女を取り囲んでる。

「ちよっと待って。裸になって踊ればいいのね。それ以上は何もしないでよ」

矢野は釘をさすように言った。
仮に約束を取り付けたとしてもそんなの意味の無い約束だろうに。この連中がそれだけで終わらせるなんて考えられないじゃないか。

「それはおまえ次第じゃないのかな。俺たちを満足させられればよし。満足させられなかったらそれ以上の事をして貰うさ。俺達を十分楽しませてくれたらそれだけで許してやるよ」

今まで何もしゃべらなかつた、黒い皮ジャンを着た髪の長い男が言った。坊主刈は不服そうにぶつぶつぶやいたがすぐに黙った。

皮ジャンの男がリーダー格のようだった。フンとつぶやくと、矢野はパンツをあっけなく脱ぎ捨てた。

股間に薄く生えた陰毛が、微かな風にふわりと浮き上がる様が眼に焼きついた。

青白い光の薄暗い世界で、濡れたような肌をした少女が両手をすつと上げた。

爪先立ちになった彼女は、上から糸を引かれた操り人形のように見えた。バレエでも習っているのか。

矢野が動き始める。両手を交差させたり身体を回転させたり、全裸を恥じることもなく脚を開いて身体を沈めたり、そんな滑らかな動きの中で、音の無い空間に静かな音楽が生まれる。

矢野の真剣な表情と、うっすら汗をかいた伸びやかな身体は、その場にいた男達の顔に張り付いていた薄笑いの表情を拭い去り、口をぽかんと開かせる結果になった。

僕も、脱力感と共に胸に込み上げて来るズキズキした痛みを感じていた。

4

「おまえって本当に強いな……」

矢野と僕は暗い道で自転車を押していた。

僕の自転車はさっきの乱闘でパンクしてしまつたし、矢野の自転車はライトが壊れているのだ。

和雄はまだ追いつかないし、さっきの事で海に沈む月を見るという目的も、なんだかどうでも良くなつてきた。

「あたしのわがままだからね。元はと言えば……。むしろ智樹クンに嫌な思いさせて悪かつたって思ってるくらい……」

暴走族の連中は、意外な事に、あの後約束通り僕らを解放してくれた。最初はその言葉の中にもあつたし、絶対矢野に乱暴するつもりだつたはずだ。

僕はそれを感じたから必死であいつらにかかつていったのだ。

なんだか自分が馬鹿な道化のように思えてきた。それなのに矢野は僕に謝るのだ。おかしな奴だ。

「ところであたしの裸どうだった？」

矢野は悪戯っぽく僕を見て笑つた。

とたんに僕は恥ずかしくなつて顔に血が上ってくる。多分今真っ赤になつてる。

「どうって、何が」

「やっとならだけ言つた。きれいだった？」

矢野は僕を覗き込む。どうでもいいじゃないか、しつこいなあ。

「あんまり見てなかったけど……きれいだったよ」

僕は矢野の顔を見ないようにつて言った。

「よかった。不細工だったらどうしようって思ってたの」

「すごくきれいだった。……自分が情けなくなるくらい」

「最後の言葉は余計だよ。智樹くんも必死で戦ってくれたじゃない。下手したら殴り殺されかねないのに、だからあたしも恥ずかしいの我慢して精一杯踊ったんだから」

「矢野の家も、両親危ないのか？ 俺の所は三カ月前に離婚したけど……」

僕は何とか話題を変えようとしてそんなことを言ってしまった。

言った後でまずいと思ったのは、その瞬間彼女の顔から笑みが消え、一気に表情が沈んでしまったから。なんて馬鹿なんだ僕は。

「あたしは早いとこ別れてほしいよ。あんな父親大嫌いだから」

矢野は吐き捨てるように言った。

矢野の目が僕を見た。父親を嫌いな理由を僕に聞いてほしそうだったけど、僕は黙っていた。

「智樹くんはお父さんと住んでるんだよね。やっぱり男の子はお父さんのほうが好きなのかな」

僕としては、この話題はもうやめたかったけど矢野はまだ続けるつもりのようなのだ。

「好き嫌いには関係ないよ。経済的な理由かな。どっちかって言えば母親のほうについていきたかった。なんと言っても別れた原因は父親の浮気なんだから」

「そうなんだ……。どうして男って浮気するのかしらね。智樹くんの所もあたしのところも恋愛結婚なのに……愛しあって結婚したはずなのにね」

「じゃあ矢野のところもお父さんの浮気が原因なのかな？」

「浮気くらいなら……いやだけど、憎むほどじゃないと思う」

「浮気くらいって、じゃあなんなんだよ」

少しむっときたけど、さっきのことで僕は彼女に対して弱い立場にいたから、それだけしか言えなかった。

「男は結婚していようがいまいが、女を好きになるもんでしょ。仕方ないことだと思っ」

ずいぶん物分りのいい子だな。浮気容認論者なのかな？

「あたしの父親は、普段はおとなしくてやさしい人だったけど、お酒が入ると狂ったみたいに人が変わるやつだったの。たいした理由も無くお母さんを殴るところを何度も見てきたわ」

「暴力夫だったのか」

「あれは酒乱よ。酔いが覚めたら必死で母さんに謝ってたもの。別れないでくれたって」

「でもとうとう堪忍袋の緒が切れたってわけ？」

「単純じゃないんだけどね。あたしも何度か殴られたりしてたけど、そのくらいじゃ憎むことも無かったと思う」

そのくらいって、たいした理由も無く殴る父親に対して言う言葉かな。憎しみを覚えるには十分な理由だと思っけど。

しばらくは黙って歩いた。

矢野の言葉は中途半端で途切れていた。僕は続きが気になったけど、黙っていた。

ふうつと息をはいて、決心したように矢野が言い出した。

「殴られたりするくらいならあたしはお父さんを許せると思うの。嫌いにはなるけど憎まないと思っ。でも、あいつ……中学になるくらいからあたしを変な目で見るようになったの。あたしがお風呂に入ってるときに間違えた振りをして入って来たりして。ニヤニヤしながらおまえも大人に近づ

いたなあって……」

なるほど。自分の親から変な目で見られることは、確かに殴られるよりシヨックかもしれない。男にはわからない悩みだ。

「ある夜とうとうあたしのベッドに忍んできたの。母さんはお友達との忘年会で遅くなる日だった。パンツ一つになったあいつは、布団を剥ぎ取るとあたしの両手を押さえつけて、片方の手をあたしのシャツの中に入れてきた」

僕はしゃべるのを止めさせたかったが、彼女の迫力に押されて、何も言えずにいた。

「おまえまだ生理は無いんだろう、って言いながら、あいつはあたしの胸をもんで、そしてパンツに手をかけてきた。あたしは必死で抵抗したけど、怖くて声も出せなかった。嫌いな時もあったけど、普段はやさしいから本当は好きだったんだ。でも、それなのに……」

夜中の国道に矢野の声だけが聞こえていた。

僕は彼女の話聞きたくなかった。親にレイプされた話なんて、あまりに暗すぎる。どうコメントしていいかわからない。彼女を見る目も変わってくるかもしれないし、そうならたらそうだったで、そんな自分自身がいやになるだろう。

知らない方がいいことが世の中にはたくさんあるんじゃないだろうか、僕のそんな想像の中、彼女の話は終わった。

矢野が僕を見つめているのがわかっていたけど、僕は目を上げられないでただうつつむいて歩いた。僕の自転車の油の切れたギヤが、かすかに、でも規則正しく僕らの歩く速度にあわせてキーキーと悲しげにないていた。

「智樹君、お父さんの浮気相手に会ったことあるの？」

唐突な質問だった。

さつきから僕が黙り込んでいたから、矢野は暗い雰囲気は何とかしたかったんだろう。

「実はあるよ。2年前だったかな。父さんにバトミントンに連れて行かれて、職場の人たちと、楽しんだんだけど、そこで会ったんだ。バトミントンのうまい人だったな。父さんはコテンパンにやられてた。おでこに汗を光らせて、僕に笑いかけたあの人は、そのときは凄くきれいだった」

歩く速度がとたんにゆっくりになる。

もう海に沈む月が見たいという気持ちは砂浜に落ちた水滴みたいにしばらく止まった。

「始めに好感持ってしまったから、裏切られた気持ちが強かったんだね」

「そうだよ。その人が父さんの浮気相手、というか不倫相手だってわかった2度目のとき、泥棒猫って言ってやった。あの人が、最初ぼかんとしたけど、すぐに口がゆがんで、涙流してた。泣くくらいなら父さんを盗むじゃないよ」

「それってちよつとひどい。どんな状況でも男女が愛し合うのは正しいって何かの本で読んだよ」

てつきり賞賛の言葉を聞けるものと思ってた僕は、矢野のきつい口調について足が止まってしまった。

彼女はお構いなしに進んでいく。

五メートルくらい離れた所で、気を取り直して彼女を追いかけた。すぐに横並びになった。

「結婚してもしてなくても、人が人を好きになるのはどうしようもない事だと思っよ」

また矢野が言った。

「でも、人に迷惑かけるのはいけないことだろ。その人と父さんが愛しあ
ってしまつたら、母さんや俺はどうなるんだよ。無責任じゃないか」

僕は最初のショックが冷めると、矢野に反論した。
矢野はこつちを見てさびしげに少し笑った。

「結婚してなくても、その人とお父さんが愛しあつたら、悲しむ人がいる
ということもあるでしょ」

「どういうこと？」

「あなたの父さんと母さんの恋愛だって、別な誰かを失恋に導いたかもし
れないじゃない。結婚したら恋愛してはいけないというのは、子供の養育
を第一義に考える宗教的な理想論だつて書いてたわ」

「本の受け売りするのはいいけど、そんな本は男の都合ばかり書いて男受
け狙つただけだよ。現実的じゃないよ」

矢野は少し黙った。

自分が信じている思想をけなされてむつときてるみたいだ。

「人を本気で憎んだ事の無い人には……どんな状況でも愛しあう事が尊
いという事はわからないのよ」

矢野の捨て台詞だ。

そう決め付けられると僕も二の句がつけなくなってしまう。

5

矢野との言い合いに夢中になつていたせいだろう、派手な赤色灯を屋根
に取り付けたその車が対抗車線に止まつてるのにまったく気づかなかつ
た。

ドアが開いて二人の警官がするりと出てきた。
二十メートルの距離はすぐに縮まった。

「君たち。こんな夜中に何してるのかな。ちょっとこつちに来なさい」
背の高い警官だった。彼は彫りの深い顔立ちで、不気味な笑みを浮かべ
ていた。

もう一人の警官が、矢野の横に立っている。

そつちは少し太つていて、年齢も上のようだった。

これで終わりだ。

海に沈む月を見るどころじゃない。補導されて前科一犯の不良少女と不
良少年のできあがり。明日には校長先生に呼ばれてきついお説教が待つて
るだろう。

自転車のスタンドを出してとめると、僕は手をひかれてパトカーにのせ
られた。

矢野はまだ外だ。

逃げようという気も起きなかった。

きやつ何するの！

矢野の叫び声が聞こえた。なんだ？僕はドアを開けて出ようとしたが、
隣の警官に制止された。

「なんでもない。身体検査してるだけさ。シンナーなんかを持ってないか
どうか調べてるんだ」

警官はそう言いながら、肩を組むように僕の首に手を回してきた。
なれなれしい人だなんて思ったけど、それはとんでもない間違いだつた。
彼は僕の首に回した腕に力をこめると、後頭部を押して絞めてきたのだ。
柔道の絞め技だつた。

息苦しくはない。ただ血管が絞めつけられて、あつという間に意識が朦
朧となった。ひよつとして偽せ警官だつたのか？

薄れていく意識の中で僕はそつ思っていた。

ヒヤリヒヤリという暴走族独特のホーンの音が耳に入ってきた。

止めてよ変態！という矢野の声も聞こえる。

エンジンをふかす爆音。怒声。

ふらつく体を起こして車の外を見ると、花火のようなバイクのライトがまぶしく交差していた。さっきまで僕の横に居た警官は居ない。

僕はよろけながらパトカーを出た。

二人の警官ともみ合ってるのは、さっき僕らに絡んできた暴走族の5人組だった。

状況がわからない。何がどうなってるんだ？

「早く逃げろ！」

確かにリーダーだった皮ジャンの男が僕に叫んでいた。

「行きましょ」

矢野は半裸の状態だ。

片方の乳房が破れたシャツからはみ出していた。

「いったいこれはなんなんだ？」

ふらつく僕の手を矢野は強引に引っ張った。

「変態警察よ、暴走族の人が助けてくれたの。急いで」

「貴様ら公務執行妨害で逮捕する！」

族の一人、坊主刈が、その叫ぶ警官の警棒で頭を殴られて血しぶきを上げていた。

「うるせえこの野郎」

皮ジャンがその警官に後ろから蹴りを浴びせる。

パトカーのフロントガラスがさらに粉々に割れて、破片が宝石のように光を乱反射しながら飛び散った。金属バットがパトカーに叩きつけられて

いた。

皮ジャンに殴られた年配の警官が、手にもっていた無線機を落とす。

その無線機は族の一人に踏みつけられ、潰された。

若い警官が、悲鳴をあげながらその場を離れようとする。

僕はまだ訳がわからなかったけど、手を引く矢野に合わせて、その場を後にした。

倒れた自転車を引き起こし、パンクしてるのもかまわず下り道を駆け下りる。

山陰から現れた満月が前を走る矢野を照らし、矢野のシルエツトがはっきり見えた。まだ月は沈みきってなかったのだ。

「ここに自転車置いて、あそこの展望所までいこつ」

矢野は胸を隠しながら振り向いて言った。

僕はとりあえず矢野の言う通りに自転車を止めた。

そして細長く伸びている階段を二人で並んで展望所まで上り始めた。上りながらさっきの出来事を矢野は解説してくれた。

僕が警官に気絶させられた後の出来事だ。

太った警官が身体検査をするから、両手を上げるといつてきた。

矢野は仕方なく言われたとおりにする。

後ろに立った警官がいきなり矢野の胸をつかんだ。

「結構発育してるなあ。もう生理は来たのかい」

矢野はとっさにしゃがんでそのいやらしい手を逃れる。

「何するのよ変態」

叫ぶ彼女。

「ふざけんな！不良の分際で。こんな夜中にガキ同士でデートかい。おじさんがもつと気持ちいいこと教えてやるぜ」

抱きつく警官の腕で矢野の服がちぎれる。

興奮した警官は矢野の首を絞めて気絶させようとする。

どうにもならない。肘を絡ませて首を絞めながら、警官は別の手を矢野のパンツに差し込もうとする。

吐き気がして冷や汗が出て、もう駄目だと絶望感がこみ上げてくる。

警官の酒臭い息、膝ががくがくしてくる。

矢野の絶望感が頂点に達しようとした時、正義の味方が現れた。

軽薄なホーンを鳴らしながら……。

彼らは瞬間的に矢野の窮地を理解すると、持っていた金属バットをパト

カーのフロントガラスに叩きつけたのだ。

5人の暴走族は僕らを助けるために警官に向かっていったのだった。

6

「そうだ。あの暴走族たちは大丈夫かな」

薄暗い階段を上りながら矢野はポツリとつぶやいた。

「5対2なら負けないだろ。もう逃げてるんじゃないかな」

あの変態警察官が懲らしめられる所が見れないのが残念だ。

「でも、あんなに憎らしく思っていた暴走族に助けられるなんて、なんだか複雑な気持ちだわ」

「本当だ。何が善で何が悪かこんがりそうだ」

「信じていたのに裏切られて、思わぬところから助けられるのね」

一步一步展望台が近づいてくる。青白い月の光に照らされたその場所は

下界から見上げた天上の楽園みたいに見える。

そのとき矢野の携帯電話の着信音があった。

なんだか忘れたけど古い映画音楽のようだった。

「風邪と共にさりぬ、よ」

僕の疑問を見越したのか、彼女はそう言つと電話を取った。

電話は和雄からのようだった。

しばらく相槌を打ちながら話した後、今いる場所を教えて、矢野は電話

を切った。

「炎上してる車の横を、今通りすぎたつて。もうすぐくるみたいよ」

クスクス笑う矢野の神経は普通じゃなかったんだろう。

僕もそうだった。

普通なら大事件だとうるたえる所だけど、今の僕らにはすがすがしい出

来事のように思っていた。

やつと展望台についた。

目の前に、暗い海とその上に浮かぶ黄色い満月がくつきりと見えている。

あんな大きな岩が浮かんでるのが、不思議な映像として僕の目に焼き付

いてくる。

「あんな所に、あたし達の影があるよ」

矢野の指差す方を見ると、一人の影が階段のはるか下まで伸びてるのが

見えた。

去る人の、影まで照らす、お月様……か。

数時間前に父から聞かされた俳句が意味もなく口から出た。

「なにそれ」

矢野がすかさず聞いてくる。

僕が説明すると、矢野はしばらく目を閉じていた。

そしてゆっくり言った。

「お母さんが出て行った夜も、きつと満月だったんだね」

ため息混じりに出てきたその言葉で、やつと僕にもその句の情景が見え

てきた。

母が出て行った夜は確かに満月だった。

街灯に照らされた母の顔を僕は見つめていた。

マンションの前の道路で、時折行き交う車のライトが交差する。

「別に死に別れるわけじゃないんだから、会いたくなったらいつでも会えるんだからね」

母は元気な声で言った。ほつぺたが引きつっていると思ったけど、よく見たら笑ってるようだった。それまでずっと父と喧嘩ばかりしてわめいていたのに、その日の母は久しぶりの笑顔を僕に見せてくれていた。

「父さんなんか嫌いだよ。僕はついでにいきいよ」

声が震えてうまくいえなかつたけど、なんとかそれだけは伝えられた。

「父さんの浮気はよくないけど、それだけでもないのよ。今は母さんも悪かつたと思うのよ」

僕には母のその言葉は信じられなかつた。

一方的に父が悪いに決まってるから。

タクシーはマンションの車止めに入ってきた。

母さんがボストンバッグを持ち上げる。

「じゃあね。たまに電話するわ。離婚しても母さんは母さんだから。智樹の母親である事には変わりはないんだからね。父さんと仲良くしてね」

タクシーに向かいながら母さんはつぶやく。

「もう父さんを愛してないの」

タクシーのドアを開けようとしたその手は、僕の叫ぶような問いかけに一瞬止まった。

でもすぐにドアを開けて、母さんは乗り込んだ。

唇をかんだ母さんの顔が、すぐに影に入り見えなくなった。

そのままタクシーは発車した。追いかけたかつたけど、安物のテレビドラマみたいに見える、おかしくなったから止めておいた。

あの時、父は部屋の窓から僕らを見下ろしていたんだ。

斜め上から見たぼくらは街灯の影が反対側に伸びていたのだろう。

その影を満月は照らしていた。

影が薄く消えていくように……。

それは二人の愛の消え去り方にうりふたつだったのかもしれない。

最初は愛しあつて結婚して、そして子供ができる。うれしくてたまらなかつただろうに、やがては気持ち離れていく。うれしくてたまらな子供が育つのと反比例して夫婦の愛情は消えていくものなのだろうか。

「きつとお父さんも悲しかつたんだと思うよ。でもどうする事も出来ないんだよ」

矢野のそんな言葉に、今までの僕なら反発するだけだつたと思う。

でも今はそつであつてほしいと願つていた。

「おーい。やつと追いついたよ。まだ月でてるかなあ」

下の方で和雄の声がした。

息を切らしながら和雄は走つて上つてくる。

「おれ、ここにくる途中一句出来たんだよ」

展望台まで登つてきた和雄は、身体を二つ折りにして息を整える。そしておもむろに顔を上げて言つた。

「こつというの。暗闇は、光がないから、影もない。どうかな」

うふふと矢野が笑つた。

僕もおかしくてたまらなくなつてきた。

海の方を見ると真ん丸い黄色の円形がゆっくりと海に接触する所だつた。

下のほうからつぶれていく。海に写る月と合体して、二つが一つになる。

「やっぱり満月も海に沈むんだな」

和雄がぼつんと言つた。

「頭でわかつてても、本当かどうかなんて実際に見てみないとわかんないよね」

矢野の言いたいことはなんとなくわかつた。

「今日は、いろいろあつたからな」

僕は和雄を横目で見て言った。

「明日からも、あさつてからもたくさんいるんなことがあるわよ。あたし達はまだ若いんだから」

「そうだよな！」

矢野に返事をする僕と和雄の声が微妙にずれながら重なる。

月が海の中に沈みきると、とたんに周囲が暗くなり星々の光が強くなつた。

東の山々はまだ闇の中に沈んでいる。

夜はまだ続いていた。

朝はまだ来ない。

海に沈む月 おわり